上のジレンマが入り込む余地はないであろうか。

以上、氏の蘊蓄を傾けた、独創的な刺戟に富む、いわば本格的な東洋社会論を、蕪雑な筆で紹介を試み、敢て二、三の質問を氏に呈してみた。氏の真意を汲み取り得なかつたとすれば。その責は全て私にある。記して氏の寛恕を請い、併せて今後の教正を期待し、又氏の研究の発展を祈る次第である。

(Lien-sheng Yang; Les Aspects Economiques Des Travaux Publics Dans La China Imperiale. Collège de France, 1964, 83 pp.)

(註)

(1) 楊聯陞氏は過去に何度も来日され、氏の業績は我国でも周知のところであるが、例えば、晉書食貨志訳註
中国貨幣金融史 Money and Credit in China, a short history, 1952 (Harvard-Yenching Monograph Series XXII)
中国制度史考 Studies in Chinese Institutional History, 1961, (Harvard-Yenching Institute Studies XX)
ほか、H. J. A. S 誌上に多くの論考を発表されている。

(2) 増淵竜夫 中国古代デスポティズムの問題史的考察(歴史学研究二二七、一九五九)

(3) 楊聯陞「中国社会関係の基礎としての報の観念」The concept of "Pao" as a social basis for social relations in China (in "Chinese Thought and Institutions" 1957)

上山大峻著

曇曠と敦煌の仏教学

山口瑞鳳

法相宗の西明寺系と見られる僧曇曠が宝応二年(七六三)以前に、長安を離れ、吐蕃の河西攻略のまにまにかの地を転々したのち沙州に至つた。この地で曇曠はいくつかの著作を残し、敦煌の仏教学に重要な役割を果したという。上山氏は、敦煌文書、Stein 蒐集の曇曠関係文献の内容を研究して、曇曠の業績を敦煌仏教学の中に位置ずけようと試みられた。たまたま曇曠の著「大乗二十二問本」を調べたところ、従来代宗の下問に答えて述べられたものとされていたのが、実は、吐蕃の王 Khri sroṅ lde btsan に捧げられたものとわかった。その内容を分析して見ると、どうしても有名な「bSam yas の論諍」に関係のあることがわかつた。そこで上山氏は、フランス、シナ学の Demiéville 教授による "Le Concile de Lhasa" と、イタリヤ、チベット学の Tucci 教授による "Minor Buddhist texts" とのうちに夫々述べられ、又、後者によって承認されたこの論諍の経過について疑念をもたれ、これを訂正し、更にその論議をめぐる年次に関しても修正を提議せられたものである。

内容は三段に分けられ、第一章 曇曠の経歴、第二章 曇曠述『大乗二十二問本』とラサの宗論、第三章 敦煌における曇曠教学の学習と影響 となつている。本論文の眼目は勿論この第二章にある。

全体を通じて論旨明瞭で、取り上げた問題にも重要性があり、優れた論文である。かいつまんで要旨を紹介すると次のようである。

Demiéville 教授は、"Le Concile de Lhasa" で「頓悟大乗正理決」をとり上げ、この中で述べられたことが、チベット文献、Bu ston の chos byuṅ 中に示された Khri sroṅ lde btsan 王の前に於ける Ha çaṅ Mahāyāna と Kamlaçīla との対決の記事に相当するとされた。この時期は、「正理決」の示す年次と、沙州降下の日にラサに来たとあることから、沙州降下の年を七八七年とする同教授により、七九二—七九四年とされた。

他方、Tucci 教授は "Minor Buddhist texts" のうちで「ラサの宗論」を『サムエの宗論』と訂正せられたが、Demiéville 教授の所説は殆んど承認せられた。

ところが、上山氏が「二十二問本」を調べて見ると、「正理決」に述べられた論諍と、Bu ston の仏教史、chos byuṅ で述べられた Ha çaṅ Mahāyāna と Kamalaçīla との御前論諍とは、実は、前後二つの論諍であり、「二十二問本」は、多分、二つの論諍の間で、Khri sroṅ lde btsan 王が、当時敦煌仏教学界の大物であった曇曠に疑義を匡した、その答であろうとなった。

右の提議は sBa bshed[1] によっても、lHo brag chos byuṅ[2] (dPah bo gtsug lag phreṅ ba の仏教史) によっても完全に支持されるもので、両書は一致して Kamalaçīla の招請は頓門一派の抗議の後に行われたとしている。[3] Demiéville 教授は lHo brag chos byuṅ も sBa bshed も手に入らなかったときに問題を論じ殆んどその委細を尽された。他方 Tucci 教授は、Demiéville 教授が用いられなかった関係資料を示し、頓門派につながる rDzogs chen pa の存在を述べ、且つ Sad mi mi bdun、即ちチベットに於ける始めての出家僧——上山氏は、「印度僧の出家」と（一五九頁）しておられるのは誤りである——関係のことなど、広くこの当時の問題を論じられたので、上山氏のとり上げられたこの点まではお気づきになられなかった。従って、上山氏が「二十二問本」の性格を調べて、この修正をなされなかったとしたら、或はこの問題も長く見過されたことかも知れない。ただ、上山氏の年代考証には可成り問題があるので次にこの点を再検討して見よう。

第一次の論諍——上山氏の云うとおり、これは一堂に会して行われたのではないと思う[4]——がラサを舞台としたものではないか（一六九頁）とされるのは、吐蕃王朝が Yar kluṅs 王朝といわれる所以を無視された提言で、肯けない。[5] 矢張り bSam yas を中心とした地域で行われたと見るべきである。

亦、「正理決」にいう論諍がこの第一次の論諍であるとされるのだから、当然そこに述べられている申—戌の年をこの論諍の年次としなければならない。更に、「正理決」の中に「沙州降下の日に贊普の命をうけて邏娑（Ra sa）に来た。」とあるから、この申—戌の年次は「沙州降下」以後の申—戌の年でなくてはならない。然し、上山氏は、「沙州降下の日、すなわち七八一年をあまり隔てない以前にラサに入った。」（一六九頁）としておられる。勿論、特別な理由を示して、既に沙州降下の日より先に第一次の論諍が起きていたとしてお

られるわけでもない。ことわるまでもなく、沙州陥落の日は、摩河衍がはじめてチベットへ来たことに関説したものであろう。とすれば、上山氏が藤枝教授のいわれる敦煌が七八一年に陥ちたとする説に拠られても、七八〇年はそれ以前の申の年だからこれをすて、七九二年から七九四年をこの論諍の年次に当てなくてはならないだろう。

Tucci 教授は bSam yas の完成と Sad mi mi bdun（又は mi drug）出家の年次を夫々七七五年と七七九年とせられた。[6] 然し、Tucci 教授は言及されなかったが、IHo brag chos byuṅ（＝P. T.）には、[7] sBa bshed の che ba より古い ḥbriṅ ba[8] によって、bSam yas は yos bu 卯の年に建て始められ、その後五年目の lug 未の年に Sad mi mi drug の出家があったとのべられている。

又、P. T.[9] と sBa bshed とには、卯の年に建て始められて、卯の年に建て終るとあり。P. T. には lo skor gcig、即ち十二年かゝったとあるから、sad mi mi drug（bdun）の出家を七七九年とすれば、bSam yas の建て終りは七八七年になる。つまり、十二年 Tucci 教授がいわれるのより遅くなる。

今、仮りにこの年次に従うと、bSam yas の rab gnas、完成の法会は、Śantarakṣita がこれをつとめているから、[10] 少くとも彼の歿年は七八七年以後となる。sBa bshed[11] でもその歿年が示されていない。P. T.[12] の引用する rBa bshed によれば、しばらくしてとあるから、この年又は翌年位に見てよいだろう。彼が遺言を託した Ye çes dbaṅ po が、彼の死後 riṅ lugs[13] に任命された。しかし、Ñaṅ Tiṅ ṅe ḥdzin（Myaṅ）との争いの結果、Ye çes dbaṅ po は IHo brog にのがれて禅定に専修した。代りに dPal dbyaṅs が riṅ lugs（rBa dPal dbyaṅs）に任命され、[14] 彼の時代になって Ha çaṅ Mahāyāna が Brag dmar に現れた。[15] その時期は沙州陥落の後となるから、若し Demiéville 教授に従えば、[16] 七八七—八年となる。ここで摩河衍の布教が效を奏して、七九二—四年の論諍が起り、結局、Kamalaçīla を招いての御前宗論が、[17] 上山氏のいう通り、この後に起るのである。とすれば、これを七九四—五年と見ることが出来るだろうか。

先に、七八〇—七八二年を第一次の論諍年次として取ることは出来ないとし、「沙州陥落の日」（七八一年）との関係でその理由を述べたが、今、陥落の日が七八〇年以前であったとしても、論諍年次をこの七八〇—七八二年には置き難いことを考えて見よう。

rBa bshed che ba に従って sad mi mi drug の出家を bSam yas 完成（七七五年）の後とし、上山氏と同様に、Tucci 教授のいう七七九年を出家の年とする。Śāntarakṣita はこの六人の出家に立ち合ったわけだから、彼の死は七七九年以後で、七七九或は七八〇年頃でもあっただろう。彼の死後、Ye çes dbaṅ po の riṅ lugs への任命、Ñaṅ Tiṅ ṅe ḥdzin との争と前者の引退、dPal dbyaṅs の riṅ lugs としての登場などがつゞき、Ha çaṅ Mahāyāna が Brag dmar に来る。摩河衍が到著して布教が始まり、信者が出来、又反対する派も現れ、二つに分れた挙句、抗争が表面に出る。これまでのことを七八〇年一年に盛込むことは殆んど不可能

でなかろうか。この点は Tucci 教授も言及しておられるから参照されたい。[19]

Sad mi mi drug 出家の頃、Ye çes dbaṅ po や Bodhisatva (Śāntarakṣita=Shi ba htsho) が先に願い出ていた通り、訳経事業が始められた。[20] Ye çes dbaṅ po が印度の仏典を。Bran ka Legs koṅ 等が支那の仏典の飜訳に当り、特に支那の Ha çaṅ Ma ko le、[21] 或は Ha çaṅ Ma Shaṅ Me skol (sBa bshed) がそのために招かれたとある。この Ma Shaṅ は少し前の有力者 shaṅ Ma shaṅ の名がまぎれこんだもので、Ma ko le, Me skol は、(Tucci 教授の引用では、[22] Ma ho le となつている。) どう見ても、me ḥgo, me mgo, mes mgo の variants に過ぎないと思はれる。[23] 最後の le は、若しかしたらこの ha çaṅ の名と関係があるかも知れない。Tucci 教授は me mgo を渾名として、その由来を、後に Ha çaṅ Mahāyāna が布教を禁止されたとき、彼が抗議して頭に火をつけて死んだことに結びつけておられる。[24] 殉教した Ha çaṅ とシナから訳経のために招かれた Ha çaṅ Ma ko le とは多分同一人物であつたろう。[23]

七七九年頃のチベット僧出家に続いて訳経事業が行われ、その為にシナ僧を招いたといえば、建中二年、即ち七八一年に、「良琇、文素を送つて、年毎に代りをやることにした。」[25] とある仏祖統紀の記事が憶い出される。建中の会盟によつてこの交流が可能になつたのであろうが、彼等の他は、後に誰が送られたのか、或はこれが一回きりであつたのか詳細はわからない。又、この二人のうちどれかが Ma ko le に相当するかどうかも知られていないが、これが関係記事である点では殆んど疑いを容れない。こういう Ma ko le が Ha çaṅ Mahāyāna の徒になつて憤死したとすれば、摩河衍の第一回論諍を、西紀七八〇—七八二年に置くことは益々困難なことになる。

「正理決敍」には、皇后没蘆氏が、摩訶衍の教化を受けて、出家剃髪したとある。

Tucci 教授は、この皇后と同敍に贊普の姨母とあるものについてチベット文献にある Jo mo Byaṅ chub と Sru Yaṅ dag とを当て、これらの考証をしておられる。[26]

P. T.[27] によれば、ḥBro bzaḥ khri rgyal mo btsan は、出家して Byaṅ chub rje と称したとあり、[28] 彼女の出家は、sBa bshed[29] でも P. T. に引用された rBa bshed[29] の文によつても、Sad mi mi drug の出家の項にひきつゞいてのべられている。特に後者では、btsan po が妃たちや貴族のうちでも出家するものが出るようにと薦めたが、なか〳〵はかばかしくこれに続くものがなかつたらしい様子が述べられた後、

それから、未の年の冬の中の月に、bSam yas が建ち終つた祝いののち、Pratihāra[39] の大供養が行われ、その際、Jo mo gcen khri rgyal mo btsan と Sru btsan mo rgyal などが得度して、その mkhan po は rBa Ratna がつとめた。

「正理決敍」にいう皇后等の出家剃髪と同じ事実を指すと思われ

る。先にも述べた通り、rBa bshed ḥbriṅ ba によると、bSam yas の建立が終ったのは、今、若し、六人の出家を七七九年とすれば、七八七年になる。従って、bSam yas 完成後の未の年は七九一年である

この未の年を、Sad mi mi drug が出家したのと同じ未の年と見ることにより、実際は、記録にいろいろの混乱が招かれた。例えば rBa bshed che ba のように、Sad mi mi drug の出家は bSam yas 完成の後に行われたとするのも、それに由来するのに違いない。次にこの理由を考えて見よう。

Sad mi mi drug の出家が bSam yas 完成後の未年であったとするならば、第一、bSam yas が出来上つてもこれを運用できないのを知りながら Śāntarakṣita が十二年十四年間、手を拱いていたことになる。事実、rBa bshed も、bSam yas の礎石がねずみの巣になるのでは困ると、Sarvāstivādin に属し、標準語を話せる僧十二名を招いて、貴族の子弟にサンスクリットを学ばしめたことを伝えている。[31] ときに未の年の春の始めの月だったという。[18]

この後に六人が出家するので、その時期は bSam yes 完成前の未の年、又はそれに続く年であったろう。

ḥBro bzaḥ 等の出家を一廻り後の未年と見るのは、この方は rBa bshed に bSam yas 完成後と明記してあることの他、次のような理由が挙げられる。

六人の出家の項に続いてこれを述べながら、改めて年次を書き入れてあること。[32]

六人出家後に、btsan po が妃や貴族等に出家をすゝめたが、はかばかしく実現されなかったことなどが述べられた上で、その後と書いて ḥBro bzaḥ 等の出家のことがしるされている。[32]

最も重要な理由は、[34] rBa Ratna が mkhan po をつとめている点である。

六人出家と同じ未の年に、ḥBro bzaḥ 等の出家の式が行われたのなら、当然、Śāntarakṣita が mkhan po の任に当つたであろう。彼の代りを出来るのは、若し、次にのべる理由がないとしても、lo tsā ba chen po rBa gsal snaṅ 即ち、Ye çes dbaṅ po をおいて他になかった筈である。[35]

然し、Ye çes dbaṅ po にしても、rBa dPal dbyaṅs にしても、つい先に出家したばかりなので、同じ年に ḥBro bzaḥ 等の出定の式を主宰する権利はない。普通十年を経てはじめて他人の出家式を主宰することができる。この観点から他の文書でも記述の改変が試みられたことも知られている。[36] 又 rBa bshed でも rBa Ratna の出家が他よりも早かったかのように書き改められている。

これらの不備を除くには、ḥBro bzaḥ 等の rab byaṅ は、Śāntarakṣita の死後で、dPal dbyaṅs が riṅ lugs をしていたときのこと、即ち七九一年としなくてはならぬ。dPal dbyaṅs が riṅ lugs をしていたとき、Ha çaṅ Mahāyāna が到来し、布教した結果、ḥBro bzaḥ 等が発心して、時の riṅ lugs dPal dbyaṅs 即ち rBa Ratna が、その出家の式を主宰した。これが「正理決敍」の記述になったのである。

上山氏の所論と以上のことから、Kamalaçīla の招請と、bSam yas 論諍の年次は、Demiéville、Tucci 両教授が考えられたそれより、一年乃至二年後と見られなければならない。[37] 従つて、七九四年或は七九五年をこれに推定できると思う。

とすれば、lDan dkar ma の目録が出来た辰の年も、七八八年とすることは出来なくなる。早くとも、八〇〇年だつたであろう。[38] 正式の訳経事業の始りを七七九年後と見れば、その訳された量から見ても七八八年に目録が成立したとは考えられない。Kamalaçīla の Bhāvānakrama が七九五年頃に出来たとすれば、このことは尚更いうまでもないことになろう。

上山氏は、曇曠の生存年代を「辰年牌子暦」に洩れているとの理由で、七八八年迄に限定しておられる。又、「二十二問本」の成立を、その写本の奥書きに示された丁卯年により、七八七年以前の成立とせられた。（一八八頁）然し、この丁卯年が七八七年だとする理由は曖昧で、考証も不充分のように思われる。亦、「辰年牌子暦」を年次考証の重要な拠りどころにしながら、藤枝教授の「敦煌の僧尼籍」を無条件に信頼しておられるが、先に述べたようなチベット史の背景を考慮せられるなら、再検討が必要になるのではあるまいか。

上山氏は、チベット学の専攻ではないようにうかがわれたので、関聯するチベット史の問題もとりあげて多少くわしくのべて見た。御参考頂ければ幸いである。

繰りかえしてのべるが、上山氏の論文は、曇曠の業績を敦煌仏教のうちに正しく位置ずけ、「二十二問本」の研究を通して bSam yas 宗論の過程についての従来の誤りを匡した優れた論文である。評者が長々とのべた問題は、上山氏の論じられた内容の極く一部分についてたてた異論にすぎない。

（京都大学人文科学研究所刊「東方学報」第三十五冊、昭和三十九年三月（敦煌研究）所収、一四一―二一七頁。）

註

（1） R. A. Stein: Une chronique ancienne de bSam-yas: sBa-bžed、チベット語テキスト写真版とフランス語要約 Paris, 1961. lHo brag chos byuṅ, Ja には同じ rBa bshed（sBa bshed）の引用が豊富にあるが、この版とは可成り違つたところもある。勿論、内容から見ても、表記法から見ても、この版より古いものから引用している。

（2） chos hbyuṅ mkhas paḥi dgaḥ ston の俗称、十七章からなる仏教史。その Ja は古代史で、貴重で豊富な引用が有名、Karma pa dPaḥ bo gtsug lag ḥphreṅ ba（1504-1566）の著、一五四五から一五六五にかけての作。（P.T. と略記する。）

（3） sBa bshed, p. 54-p. 64. P.T. Ja, f. 114a-119 a.

（4） sBa bshed, p. 54, P.T. Ja, f. 114a: 「lta ba ma mthun nas brtsod par gyur、見解（哲学的見解）があわず論諍になつた。」とあり、Kamalaśīla を迎える前に、sBa bshed, p. 56, P.T. Ja, f. 116 a: 「bSam gtan gliṅ du sgo bstams nas zla ba bshiḥi bar çags slob. サムテンリン（bSam yas院内寺院の一）にとじこもつて四ケ月の間討論のしかたを習つた。」

とある。頓門派の一党は漸門派と先に brtsod 論諍はしたが、論理学の法にかなつた討論には慣れておらないので、この方面に名のあつた Kamala'sila をむかえうつためにことさらの準備をした旨伝えているのである。

(5) Tucci: Minor Buddhist Texts II, p. 32–34, p. 285—286, adenda.

(6) ibid: p. 26–32.

(7) P.T. Ja, f. 102 b.

(8) M.B.T. II, p. 17 n. 1; Stein: sBa bshed の introduction.

(9) P.T. Ja, f. 89 b, sBa bshed, p. 45–46.

(10) P.T. Ja, f. 99 b, sBa bshed の引用は f. 99 b—101 a にある。

(11) sBa bshed, p. 53, P. T. Ja, f. 114 a の rBa bshed の引用。

(12) P.T. Ja, f. 114 a: de nas riṅ shig na.

(13) M.B.T. II, p. 56 n. 2.

(14) M.B.T. II, p. 41—42, p. 52—54.

(15) P.T. Ja, f. 115 a; M.B.T. II p. 33.

(16) Le Concile de Lhasa, p. 177.

(17) 禅宗再布教の許しを出しておいて btsan po は Ye çes dbaṅ po を呼びにやり、lHo brag から帰つた後者の進言で Kamalaśila が招かれたのである。許可のあつたのは七九四年の一月十五日、Ye çes dbaṅ po はなか〳〵 lHo brag から帰らなかつたらしいが、七九四年中には btsan po のものに来たであろう。その後、Kamalaçila がつくには、多分四ケ月以上はかゝつている（注4参照）のだから、早くて年内、遅くても翌年前半にはついたであろう。

(18) P.T. Ja, f. 103 a に引用された rBa bshed の文によると、未の年の春の始めの月は、十二名の説一切有部の僧がサンスクリットを教えにチベットへ招かれた時を示すので、それ以後の或時、その際サンスクリットを学んだ人々を含めた六人が出家したことになつている。従つて、七七九年の大部分を Śāntarakṣita 死後の事件に充てることは殆んど出来ない。

(19) M.B.T. II, p. 31; Le Concile de Lhasa, p. 177.

(20) P.T. Ja, f. 105 a (rBa bshed の引用)。

(21) ibid: f. 105 a

(22) M.B.T. II, p. 47 n. 1 の続き、出典は P.T. Ja, f. 105 a とある。

(23) M.B.T. II, p. 10—11; sBa bshed (p. 52) には、インド仏典飜訳に当つた Ye çes dbaṅ po の助手として Kha che Ananta と rGya me ḥgo とがあげられているが、P.T. (Ja, f. 105 a) の引用する rBa bshed の相当文には二人の名前は出てこない。この二人は、sBa bshed (p. 10) と、P.T. (Ja, f. 78 b に引用された rBa bshed) に rGya mes mgo, rGya me mgo と、rGya Ananta rGya gar Ananta, とあつて、チベット国内の大勢が仏教支持に至つていない頃、Khri sroṅ lde btsan が、ひそかに支那と印度の仏典を夫々飜訳させた人物となつている。rGya

Ananta はカシュミール系の lo tsa ba であるし、rGya me mgo はシナの人である。rGya me mgo を Ye çes dbaṅ po のもとでの印度仏典の飜訳助手とした点からも、後の混同であることが知られる。このシナ人の飜訳僧を Me mgo と呼ぶのは、六人のチベット僧出家に続いて訳経事業が起り、それに招かれた一シナ僧 (Ma ko le) が、後に Ha caṅ Mahāyāna の徒に投じて憤死して Me mgo (頭燃) と渾名されたところから、前後二人のシナ人訳経僧を混同し、遡って彼にもその渾名が冠されたものと見られる。なお仏教徒の抗議自殺、頭燃に関しては J. Gernet: Les suicides par le feu chez les bouddhistes chinois du Ve au Xe siècle (Mélanges, Institut des Hautes Etudes Chinoises 刊 t. II. Paris, 1960, 527—558 と J. Filliozat: La mort volontaire par le feu et la tradition bouddhique indienne, (Journal Asiatique, 1963. Tome CCLI, p. 21—51) 参照。

(24) M.B.T. II, p. 10, rGyaḥi ston pa (sBa bshed p. 55) ha çaṅ me ḥgos (sBa bshed p. 57), rGyaḥi hva çaṅ Ma mgo (P.T. Ja, f. 115 a), Hva çaṅ Me mgo (P.T. Ja, f. 116 b).

(25) 仏祖統紀、巻四一、大正四九、三七九頁上、七八一年に吐蕃が仏理をよく講ずるものを乞い、良琇・文素が派遣されたというのは、「二十二問本」の曇曠と類似の役目を務める為ではなく、飜訳事業のため、常駐する人を要したからであろう。「歳一更之」の句によつて判断される。若し、これが、シナとインドの両仏教が衝突しているときとしたら、奇妙なことになる。贊普が困惑したのは、むしろ禅門の人達に対するその後の遇し方だつたので、一応彼等に対する禁教をといて、lHo brag に身を退いていた Ye çes dbaṅ po に幾度も使を遣り、彼を呼びよせ、禅門の徒をしめだす手段を講じたのである。Ye çes dbaṅ po は Śāntarakṣita を招くのに骨を折つた人物で、チベットに於ける彼の第一の弟子であつた。この事態にあつて贊普は、たとへそれが禅門の人でなかつたにしても、シナから僧を招くとは考えれらない。まして「歳一更之」ということは、どうしてもこの場合にそぐはない。

(26) M.B.T. II, p. 36. n. 2; p. 37. n. 1.

(27) P.T. Ja, f. 98 b.

(28) M.B.T. II. p. 36—37 n. 2.

(29) sBa bshed p. 51; P.T. Ja, f. 104 b.

(30) P.T. Ja, f. 103 a.

(31) P.T. Ja, f. 103 a: このときサンスクリットを学んだ五人のチベット人の名が出ている。

(32) sBa bshed (p. 51) には年次を除いてあり、恰かも sad mi mi drug の出家と同年のように書かれている。

(33) sBa bshed p. 51: de nas, P.T. Ja, f. 104 b: de nas lug gi loḥi dgun zla ḥbriṅ poḥi ṅo.

(34) rBa Ratna, rBa Ye çes dbaṅ po を含む sad mi mi drug について後代これを sad mi mi bdun にし上げこと、及び六人についての考証は Tucci 教授が M.B.T. II, (p. 12—25.) の

うちにくわしくされている。亦、rBa Ratna については特に p. 12, 16, 18, 20, 22 に述べておられる。Tucci 教授は、シナの使者 ḥBaḥ deḥu の子 rGya phrug gar mkhan San çi (sBa bshed p. 4, 5; P.T. Ja, f. 73 b—deḥu ḥi bu: f. 74 a rBa bshed の引用) と rBa San çi ta とが別人である点については、これを P.T. (Ja, 104 a) と同様承認せられた (M.B.T. II, p. 22—24) が、なお、dPal dbyaṅs=Ratna=Khri bsher の子という関係を認めるのをためらつておられる (ibid: p. 20, p. 22) 一つには、rDzogs chen pa のテキストの訳者に gÑan dPal dbyaṅs の名があり、この人は rBas (=rBa, sBa, ḥBaḥ) 氏に属していないところから、dPal dbyaṅs は gÑan 氏だつたが、彼のもたらす光栄を rBa 一族によせるため dPal dbyaṅs を rBa 氏の出身にしたてた (M.B.T.II, p. 150)、つまり rBa Ratna=dPal dbyaṅs の関係を捏造したのではないかと疑われるのである。更に、rBa bshed によれば、dPal dbyaṅs は ḥBah Khri bsher San çita と別人であるとしている旨を述べられ、疑念の理由としておられる。(ibid. p. 20).

しかし、不思議なことに、sBa bshed (Stein ed.) でも、P.T. に引用される rBa bshed の文でも全然教授のいわれるところと反対の記述になつている。先ず、sBa bshed (p. 50—51) では、ḥBah Khri gzigs が他より先に出家して贊普に「汝はチベットの宝なり。」といわれ、rBa Ratna と称せられたとあり、続いて、sBa gSal snaṅ, ḥBaḥ Khri sher saṅ çi ta 他、計六人の出家者の名が出たあとに、名も Ye çes dbaṅ po, dPal dbyaṅs などとつけられたとある。Ha çaṅ との論議の際も、Ratna (=Khri gzigs) と dPal dbyaṅs (=Saṅ çita) とは区別するが、Khri bsher が dPal dbyaṅs と別であるとするところはない。而も Ratna, dPal dbyaṅs の区別は後述のように後代の改変と見られる。

次に、P.T. (Ja, f. 103 b) に引用された rBa bshed では、サンスクリットを他の人より先に学んだからとの理由で、rBa Khri gzigs が一番に出家し dPal dbyaṅs と名づけられ、rBa Ratna とも称せられたとあり、ここでは、ひきつずいて Saṅ çi ta を除いた五人の名が連ねられている。

亦、すぐ先に (P.T. Ja, f. 103 a)、同じく rBa bshed を引用して、十二名の Sarvāstivādin の人々からサンスクリットを学んだ五人の名があげられているが、そのうちには rBa Khri bsher の子 Khri gzigs 又 (の名) は Saṅ çi ta となつている。dPaḥ bo gtsug lag ḥphreṅ ba 自身も(Ja, f. 104 a) Khri gzigś San-çita=Ratna=dPal dbyaṅs を認め「Bu ston のような学者さえ rBa Khri gzigs を一番目と三番目に重複してあげている」と批判している。Ha çaṅ Mahāyāna との論議の際、Kamalaçila の後に続いた人の名としても、P.T. (Ja, f. 16 a)の引用する rBa bshed では、rBa dPal dbyaṅs, Bairotsana, Ye çes dbaṅ po などと挙げられ Ratna と dPal dbyaṅs との重複はない。

sBa bshed と P.T. の引用する rBa bshed とを比較する

と、一般的に後者の方がより古い写本に拠るものと考えられる(註一参照)他、前者では、Sad mi mi bdun の考え方が固定してから一人を二人にわけたことが歴然としているので、これをそのまゝ採用することはできない。sBa bshed では御前論諍の際、Kamalaçīla に続いた人として、rBa Ratna を dPal dbyaṅs と重複して挙げるため、重要な Ye çes dbaṅ po を削つている(sBa bshed, p. 57)のが見られる。これはむしろ後代の改変を示す証拠といわねばならぬだろう。

(35) Ye çes dbaṅ po が dPal dbyaṅs(=Ratna) よりも上席であつたことは、riṅ lugs には Ye çes dbaṅ po が先に任命せられていることからもわかる。(sBa bshed p. 53—54; P.T. Ja, f. 114a—b) 次に、sBa bshed に述べられたgSal snaṅ(=Ye çes dbaṅ po) の活躍は、rGya phrug gar mkhan Saṅ çi と共に Khri sroṅ lde btsan の年少の時、なお、Bon教を奉ずる徒が勢を占めていたときから始まる。彼が Śantararakṣita と会つたのも早く、Ye çes dbaṅ po の名はそのとき既に前者から与えられたものである。Sad mi mi drug の出家に継ぐ訳経の際も lo tsā ba chen po (P.T. Ja, f. 104 b; sBa bshed, p.52) としてこの事業を遂行した。しかるに、何故 sBa bshed (P.T. Ja の引用も含めて) では sBa khri gzigs (=Ratna=dPal dbyaṅs) が、サンスクリットを他より先に学んだからなどとの理由で出家を特別早くしたように書いたのであろうか。答は次のように考えられる。rBa bshed ḥbriṅ ba 以外では、六人の出家を bSam yes 完成後と見たので、Khri rgyal mo btsan の出家したという未の年は六人が出家した未の年と同年になる。而るに、六人の一人である rBa Ratna が Khri rgyal mo btsan 等出家の mkhan po をつとめた。このこと柄に妥当性をもたせるためには、rBa Ratna が他の五人とは別に先に出家したとしなければならない。このようにして極めて不備な理由がつけられてこの改変記事が挿入されたのである。

今一つ興味ある事実をつけ加えて置きたい。御前論諍の際、Ye çes dbaṅ po と共に dPal dbyaṅs も附帯意見を述べている。しかし、彼の意見は、Ye çes dbaṅ po のそれにくらべて全くすつきりしないものがある。元来シナ側に与みする意見であつたか、或は、いづれの側を支持するのかわからぬ曖昧なものであつたのを後に Kamalaçīla 側の意見であつたかのように改めたのではないかと疑わせるところが多い。この点を次の事実と併せ考えて見よう。

彼は、Ye çes dbaṅ po の失脚後、riṅ lugs に任命せられた。

彼が riṅ lugs であつたとき摩訶衍の布教が許された。

彼は摩訶衍に帰依した ḥBro bzaḥ Jo mo byan chub の出家式に mkhan po の役をつとめた。

彼が riṅ lugs であつたのに、khri sroṅ lde btsan はばる前の riṅ lugs Ye çes dbaṅ po を呼んで摩訶衍の一党に対する処遇を相談した。

このようにして見ると次の疑が生じてくる。即ち「正理決序」

のなかに出てくる僧統大徳宝真、俗本姓鴉とは dPal dbyains でないかということである。僧統は riñ lugs、宝真は Ratna sançita の意訳とも見られないだろうか。然し、鴉氏から ḥBaḥ (rBa, sBa) は出て来ない。鴉の古音は Ngiek 又は Ngak (Le concile de Lhasa, p. 33. n. 6) であるから ṅNegs 又は ṅNog 氏となり、むしろ、rBa bshed が抗議した人のうちにあげる rṄegs rin po che 或は rṅNog が近くなることを誌すにとどめよう。

(36) P.T. Ja, f. 102 b.

(37) 註 17 参照。

(38) M.B.T. II, p. 48 n.

(39) chos skyoṅ Pehar (gnod sbyin sde dpon chen po)

田村実造著

中国征服王朝の研究 上

村上正二

田村実造博士は名論文「元朝札魯忽赤考（桑原博士還暦記念論叢）」を学界に発表されて以来、過去約四十年の長きにわたつて、北アジアの遊牧民、とくにモンゴル系遊牧民の研究に従事され、契丹民族と遼朝、モンゴル民族と元朝、さらに明、清時代のモンゴル族に関する数多くのすぐれた研究論文を発表されて、われわれ世代の内陸アジア研究者にとつて、つねによき先達であられた。本書は、従来発表された諸論文のうち、博士が若き日以来、とくにご専門とされてきた契丹民族と遼朝に関するものの集大成である。序章の〝北アジアにおける歴史的世界の形成と発展〟につづく第二章以下の各章では、遼朝建国前のキタイ族、遼朝の成立、遼朝をめぐる国際関係、遼宋の交通と遼国内の経済的発達、遼国内の社会に関する諸問題を順に取扱い、最後にキタイ族固有の社会生活一般でおさえるという風に、従来のご労作にめんみつな訂正を加えられた上、それらをきわめて順序よく、かつ系統的に纏められている。今日このように、博士の遼朝に関するご研究をこの一書で総観できるようになつたことは、われわれのみならず、学界一般にとつても、はなはだ慶賀すべきことであろう。

さて、そのひとつびとつについて、簡単ながらその内容にふれて行きたい。まず、序章においては、アジア大陸はその複数な地形から、過去においては決して一つの世界を形成したことはなく、東、西、南、北という四つの異なる文化圏があつたとされ、そのうちでも、とくに太古以来この大陸にみられた北アジア文化圏と東アジア文化圏との対立の問題を取上げて、博士の取扱う北アジアの地区においては、それがそれ自体として、一つの独立した歴史的世界を形成し、展開して行つたこと、その展開の過程において遊牧王国と中国征服王朝との二つの型式が生じたことなどをきわめて要領よく述べられ、その歴史的性格をわかり易い言葉で概観して、最初の征服王朝として成立してくる遼朝研究への導入を果される。そして本論